

ロアルド・ダールの故郷を訪ねて

A Journey to Roald Dahl's Home Town

田淵博文

私にとってイギリス滞在の目的は、ロアルド・ダールの博物館 (The Roald Dahl Museum and Story Centre) に行つて保存資料を調べ、彼の家族の人たちと話をすることであった。一昨年(2019年)の6泊8日のイギリス旅行の収穫は、ロンドンでの自由行動の日を利用して、妻と一緒にダールの博物館を訪ね、その後教会の墓地に行き、雨の中彼のお墓を探し回り、運よく墓参できたことである。一昨年はわずか1日間の訪問であったので、昨年は9月4日、9月8日、9月9日と3日間に亘つて、ダールの故郷である Great Missenden を再訪した。

British Rail (BR) で、ロンドンの Marylebone 駅から、Chiltern 鉄道に乗り、Great Missenden 下車、約40分間の距離である。日帰り往復切符で、10.2ポンド、1ポンドを130円と換算して、約1300円ぐらいである。9月4日の第1回目の訪問の際には、ダールの墓、ダールの博物館を訪ね、その後 Café Twit で昼食をとった。

ダールの墓を訪れていた時に、偶然車で来ていた花屋の若い女性に出会った。短い時間であったが、彼女と話し、毎週ダールの墓の花を家族の依頼で取り替えにきていること、ダールの長男の Theo 夫婦が現在アメリカに住んでいて娘が一人いること、ダールの孫の Sophie が最近ジャズ・ミュージシャンの Jamie Cullen と結婚し、Great Missenden 駅近くの高台に住んでいることなどを教えてもらった。

また9月8日に、3回にわたり(12:30、13:30、14:30から)約30分間、保存資料の説明がなされること、さらに9月9日(日)が Roald Dahl Day で、ダールの家族が暮らしていた Gipsy House が一般に公開されることなどがわかった。全くそのような行事があることを予想もしていなかったので、改めて運の強さを実感した。

9月8日にダールの博物館を訪れ、13:30と14:30の2回にわたり、学芸員から保存資料の説明を受けた。内容は2回とも全く同じで、20-30分間の簡単な早口の説明であった。ダールの保存資料はよく整理されてきちんと棚の箱に収められていた。写真撮影は厳禁で、多くの貴重な資料を写真に収めることができなかつたことは残念であった。

ダールの児童文学書に *Fantastic Mr Fox* という家族愛を描いた作品がある。映画化もされて日本でも封切られた作品である。ダールがこの原稿の下絵として挿絵を描いていたが、なかなかのものであった。ダールが最初に意図していた最後の終わり方は、現在出版されている版よりも、Wes Anderson 監督が映画化した終わり方に近いものであった。

私は、保存資料を手にとって閉館時間まで、3-4時間ぐらいじっくり調査できるのだろうと期待していたが、それは無理だと断られた。原稿の管理も大切な仕事ではあるが、もっと柔軟性をもってほしいと強く感じた。まだ一般に公開されていない原稿が眠っていることなどの説明を聞くと、じっくりと閲覧できないのが残念で仕方なかった。粘りに粘って、資料室の外にある本の棚に整然と置かれていたダールに関する書籍をなんとかメモすることはできた。1時間ほどして中庭に出てみると、若い職員たちが、明日の Roald Dahl Day の準備に追われていた。飾り付けや色を塗ったりしながら淡々と仕事をこなしていた。

9月9日(日)はいつもより早目に起きて宿を出た。思ったとおり、地下鉄が動いていなくて、BRの Marylebone 駅まで歩く羽目になった。速足で地下鉄の Baker Street 駅から約7分間ぐらいの距離であった。運よく、定刻に Chiltern 鉄道に乗れたので、Great Missenden 駅には、朝の9時過ぎに到着した。午前11時から Gipsy House を見学できる予定であったが、それまでに時間があつたので、地図を頼りにその界限を散策した。Whitefield Lane と書かれたところを右に回り10分間ほどまっすぐ進んで行くと、全く偶然に Gipsy House と書かれた木の表札に出くわした。私が思っていたように庭はきれいに刈り込まれ、さまざまな可憐な花が咲きとても美しかった。垣根越しに広大な敷地や果樹園が垣間見えた。朝早くから赤いTシャツを着たたくさんボランティアの人たちがこの日のための準備に追われていた。Gipsy House から、ダールがいつも(愛犬の Chopper を連れて)散策していた道を30分間ほどかけてゆっくりと登っていった。道幅は車1台がやっと通れる広さで、上っていくにつれてだんだんと道幅が狭くなっていった。途中ジョギングをしている人に出会ったぐらいで、静かに続く散歩道であった。この丘の中腹の高台に住んでいる人たちは相当のお金持ちだろうと思った。ダールは都会暮らしが嫌い、静かで平和なこの田舎の地 Great Missenden を終生こよなく愛した。登っていくと道が2つに分かれているところに出た。その景色がダールの死後出版された随筆集 *My Year* で紹介され、かつてジプシーたちが通った道であると書かれていた景色にそっくりであった。眼前の景色は、さし絵画家の Quentin Blake が描いている絵と全く同じ光景であった。そこから急に一方の散歩道が細くなり、多くの木々が繁茂してうす暗く、日光がさえぎられ少し翳っている感じがした。そこに立って感じた私の心境は、*The Minpins* の中に登場する主人公 Billy の心境に重なるものであった。Billy が怖ろしいと感じた「ミンピンの森」の入り口に今立っているのだと直感した。この大きな木々が四方を取り囲み、ぎっしりと伸びた枝がまるで屋根のようにそびえ、空も見えない静かな光景をたとえて「巨大な誰もいない緑の大聖堂の中の死んだ人たちの間にいるようだ」と Billy が形容しているのもわかるような気がした。自然をこよなく愛し植物学者のように博識であったダールの一面も、この美しい自然に恵まれていたからこそ、育まれていったのだと強く感じた。

ダールの死後、1991年に出版された *The Minpins* という本は、ダールの強い希望でさし絵が Patrick Benson によって描かれている。軽快な淡いタッチのさし絵を得意とする

Quentin Blake ではなく、緻密で静謐な感じのさし絵を得意とする Patrick Benson を、ダールがあえて指名したのもうなずける。私はこの本は、メッセージ性があり、さし絵と本文とがぴったりと調和していることから、イギリスの児童文学史上に残る古典のひとつであると確信している。

散歩を終えて平地に下って降り、交差点がある Whitefield Lane と書かれたところに戻り、写真を撮っていると、にこにこ微笑みながら私に近寄ってきた20代ぐらいの青年がいた。私が「ダールが大好きで日本からこの日のためにここに来た」と言うと、彼が喜ぶながら笑顔で「また後で Gipsy House で会いましょう」といって別れた。後からこの人物が、ダールの孫の Ned (つまりダールの次女 Tessa Dahl の末っ子) であるとわかった。Ned に会えたことも全くの偶然であった。

この日は特別にダールの作品の舞台となったいくつかの場所を、ダールの博物館の中で一番若そうな職員が、一行 (20人ぐらい) を連れて40分間ほど案内してくれた。案内書に書かれてあることを簡単に説明しただけであったが、作品の舞台となっていた場所は、あらかじめ写真に収めていたので、よく理解できた。その後引き続き、Gipsy House まで我々一行を連れて行ってくれた。

長年の夢であったダールの家族が暮らしていた家 (Gipsy House)、書斎小屋 (hut)、庭、果樹園、畑 (園芸場)、温室、箱馬車 (caravan) などを見学できる喜びは、筆舌に尽くせないほどであった。ダールの多くのすばらしい作品が生まれた創造の秘密を垣間見えるという喜びは、20年以上にわたり、ダール一筋にこつこつと研究してきた私にとって、天にも昇る気持ちであった。「至福のひと時」という言葉があるが、おそらくこのような心境を示す言葉なのだろうと思った。

Gipsy House に入ると、例の青年 Ned が笑顔で出迎えてくれ、庭の中を案内してくれた。ダールが暮らしていた母屋、ダールが作品の構想を練っていた、入り口が黄色の扉の書斎小屋、*Danny the Champion of the World* の中に出てきた、ピンクと水色とで美しく塗られた箱馬車、*Esio Trot* の中で亀が登場するが、温室の中で65年間も長生きしている亀、映画 *Charlie and the Chocolate Factory* の撮影の中で使用され、白文字で大きく Wonka と書かれている赤色の車、*My Year* の中でリンゴの木が出てくるが、広大な果樹園に植えられている多くのリンゴの木、また母屋に一番近いリンゴの木の根元に埋葬されているダールの愛犬であった Chopper の墓などの場所を懇切丁寧に教えてくれた。

ダールは猫が嫌いで大の犬好きであることは知識として知っていても、まさか自宅の庭の中の温室に長年亀を飼っていたとは驚きであった。「経験は最上の教師である」という諺があるが、全くそのとおりであると痛感した。

亀が仲立ちとなって控えめな老人 Hoppy さんが、アパートの階下に住む未亡人の Silver 夫人を射止めるという *Esio Trot* という一見 happy ending (実は少し dark ending) で終わる作品があるが、このタイトルを逆から読むと Tortoise で亀のことである。おそらくダー

ルは長年亀にキャベツなどのえさを与えたりする過程で、物語の構想がひらめいたのに違いないと思った。また果樹園は *My Year* を読んで、相当な広さであることはわかっているが、どんな木がどのような間隔で植わっているのかなどは、その土地を実際に訪れていないとわからないものである。ましてや、ダールの愛犬であった *Chopper* の墓が、リンゴの木の下にあるとはイギリス人でも気付かないものである。

ダールの書斎小屋は、私が思っていた以上に小さくて狭かったことである。ダールは毎日、午前10時から12時までと午後4時から6時まで、必ず執筆のために書斎小屋に向かった。作品を生み出すために自らを律していたことがわかる。作品の世界に浸るために、書斎のカーテンはいつも閉められていた。学問をするためにはまず静かな環境が必要である。作家にもそのことが言える。誰にも邪魔されず没頭できる時間を毎日4-5時間持っていたことで、ダールは世界的に有名な児童文学作家・短編作家として名を残したと言える。

「継続は力なり」という諺があるが、こつこつと地道に努力し、わが道を歩んでいったダールの姿は、まさしく亀の歩みに似ている。まさかダールが作家になろうとは、レプトン校の当時教えた先生たちは思ってもみなかったことだろう。ダールの成績表の国語作文 (*English Composition*) のコメント欄に書き添えられている担当教員の批評は、どれもすべて辛らつな酷評ばかりであった。人間の可能性は教師といえどもなかなか引き出せないものである。逆説的に言えば、案外身近にいるものほど、その人の秘めた無限の可能性などわからないと言えるのではなからうか。

ダールは戦時中、イギリス空軍 (*Royal Air Force*) の戦闘機のパイロットをしていた関係で、特別に近くの町から *RAF* の吹奏楽団が友情出演し、庭の片隅ですばらしい演奏をしていた。またダールの長男である *Theo* 夫妻がわざわざこの日のためにアメリカからはせ参じ、テントの中でチャリティー・バザーを行っていた。CD や父親の著書2冊 (*Charlie and the Chocolate Factory*, *The Mildenhall Treasure*) や *Great Missenden* で作られたイチゴジャムなどを販売していた。*Theo* は3歳の時に、乳母車でニューヨークの交差点を渡っていたときに、タクシーにはねられ、長く水頭症を患い、脳にたまった水を抜くための切開手術を何度もしていたことを知っていたので、*Theo* の元気な姿を見ることができて安心した。奥様は明るい性格のアメリカ人で2人とも幸せそうであった。

Ned が *Theo* からその2冊の本をわざわざ購入して、*Theo* 夫妻にサインをしてもらい記念品として私に贈呈してくれた。*Ned* は、笑顔を絶やさず周りの人を明るくさせるタイプの人物であった。そこで話をしていたら、母屋からテントの方に出てきたダールの奥さんの *Felicity* (愛称 *Liccy*) に偶然会うことができた。簡単に彼女と挨拶を交わした後で、*Ned* から贈呈された本2冊にサインを頼むと快く書いてくださった。最後には *Ned* にもサインをもらった。ダールの2番目の妻である *Liccy* とは、*Theo* も *Ned* も直接血はつながっていないが、ダールの死後でも彼らは仲良く助け合っているのだろうと感じた。

ダールの最初の妻であった女優の故 *Patricia Neal* とダールの再婚相手である *Liccy* とは、

今ではお互いに和解しているようだ。Liccy は、私が思っていた以上に若くて健康そうだった。庭を見に来てくれていた人々に、気軽に声をかけていた。おそらくダールの死後、Liccy も健康維持のために、ダールが散歩していた同じ道を散策し、園芸に精を出しているに違いないと思った。

園芸場には、ダールが好物であった玉葱のほかに、小さい粒のリングが実をつけ、ニンジン、パセリなどのハーブ、かぼちゃなどがきちんと栽培されていた。おそらくガーデニングがダールの息抜きであったのだろう。さらに進んでいくと、木の植え込みで迷路が作られていた。子供たちが迷路から抜け出そうと、一生懸命に走り回っていた。ダールは遊び心があり、子供のような純粋な気持ちを、年をとっても失っていなかったのだろう。

午前11時から午後3時半頃まで、Gipsy House の母屋と庭や果樹園などを見学し写真に取めた。Ned にお礼を言って再会を誓いその場を離れた。願わくば、ダールの妻の Liccy に、夫であるダールの思い出話などを聞いてみたかった。イギリス人の私生活までは、相当親しくならなるとなかなか聞けないものである。今回の出会いを最初のステップとして、これからも地道にダールの家族たちと長い付き合いをしていきたいものである。